

パンタライ
ΠΑΝΤΑ ΡΕΙ
Chiba University of Commerce
Archives Newsletter
R. Endo



「学生と語り合う、ありし日の石井先生(大学キャンパスにて)」(昭和40年代)

『千葉商科大学学報』第4号(昭和49/1974年7月30日発行)は、千葉商科大学第3代学長・石井頼三の追悼号であった。1974年5月12日に逝去した石井を悼み、一面は「故石井学長のご霊前に」と題し葬儀の様子が伝えられ、二面は「故石井先生追悼座談会」、三面は「足跡を辿る・略歴」、四面は「エピソード・研究業績 先生最後のお言葉」と続いた。

この写真は、四面に掲載された「学生と語り合う、ありし日の石井先生(大学キャンパスにて)」と題された写真のアザーカットである。学報掲載のものとアングルはほぼ同じであるが、学報掲載版は白黒で石井がやや右を向いているのに対し、こちらはカメラの方を向いているうえ、カラー写真で見ると学生たちと和やかに談笑している様子がより伝わってくる。



石井 頼三 (1899-1974)
千葉商科大学第三代学長

略歴

- 大正8年3月 鳥取師範学校本科第1部卒業
- 14年3月 東京高等師範学校理科第2部卒業
- 昭和7年3月 東京文科大学化学科卒業
- 7年4月 財団法人理化学研究所研究生(非常勤)
- 10年3月 財団法人理化学研究所助手
- 15年8月 東京帝国大学講師(非常勤・昭和34年3月まで)
- 17年2月 東京商科大学予科教授兼附属商学専門部教授
- 19年10月 理学博士を授与される
- 24年6月 一橋大学教授
- 25年4月 千葉商科大学非常勤講師
- 29年4月 日本商品学会会長となる
(昭和39年3月まで及び同41年4月から現在まで)
- 36年3月 一橋大学退職
- 36年4月 千葉商科大学教授兼学長代理
- 41年12月 千葉商科大学学長職務代行
- 42年1月 千葉商科大学学長兼千葉短期大学学長
- 49年5月 12日午後11時20分東京都葛飾区吉田機司病院にて急性胃拡張症により死去

「石井頼三」 千葉商科大学を牽引した人々②

この石井頼三の略歴は、『千葉商科大学報』第4号(昭和49/1974年7月30日発行)に掲載されたものである。石井学長の「追悼号」として発行された同学報によれば、石井の本籍は「鳥取県八頭郡若桜町大字若桜269番地」、生年月日は「明治32年3月1日」、「叙位叙勲」は「昭和45年4月29日 勲三等瑞宝章を授与」「昭和49年5月12日 正四位に叙」されたこととある。少し補足すると、石井は鳥取師範学校を卒業後に鳥取県八頭郡若桜の小学校訓導となったが、学問を志し上京、東京高等師範学校の第2部へ進学した。同校卒業後は和歌山で旧制中学の教諭をつとめたが、1929(昭和4)年に東京文科大学が設立されると一期生として化学科へ入学した。東京文科大学は東京高等師範学校専攻科を改組し設立されたもので、筑波大学の前身校である。

学者としての石井の経歴は紙幅の関係で詳しくは触れられないが、東京文科大学卒業と同時に「特殊鋼の含むバナジン定量法」を『理研集報』(第11巻2号)に発表して以降、戦前戦後を通じて、科学者として多くの研究業績を残した。一橋大学教授と兼務する形で新制大学として発足した千葉商科大学非常勤講師に着任したのは1950(昭和25)年4月のことであった。同年1月に『商品学』(『現代商学全集』第4巻、春秋社、1950年1月)を発表するとともに、同年4月には日本商品学会を再興した。なお、日本商品学会のホームページによれば、「日本商品学会は、1935(昭和10)年に設立された、商品の生産・流通・消費・廃棄・リサイクル等について学術的かつ学際的な研究を行うための学会」であり、1943(昭和18)年に一旦幕を閉じたが、1950(昭和25)年に再興された。学会再興にあたり、発起人の1人となったのが石井であった。研究活動の軌跡を見ると、石井の学者としての活動基盤は同学会にあったと言える。



卒業証書を授与する石井学長 1970(昭和45)年3月21日

『瑞穂新聞』創刊号(学友会文化部連合会発行、昭和42年10月30日)には、学友会々長石井頼三からの寄稿文「創刊号に寄せて」が掲載されている。学長が学生団体である学友会の会長をつとめていたこと自体が千葉商大のひとつの特徴であろう。石井は「単なる一個人の意見を強調する場となつてはならない」と同紙の継続的発展を願うとともに、本学学生の特徴については「千葉商科大学の学風が重厚で、学生も思想穏健である」ことを

外部から指摘され褒められるが、「これは学生諸君一人一人が立派であるということ」と賛辞を送っている。

さて、前述の石井学長追悼号には複数の追悼文のほか、石井を偲ぶ座談会の記録、千葉商科大学学長としての多くのエピソードや思い出も掲載された。それらによれば、石井の人柄は「謹厳実直」「几帳面」「学問一筋」といった印象が強かったようである。理路整然、論理的に物事を考える人物で、職務にも実直であったという思い出が主に語られている。ただ、「意外にユーモアがあった」こともエピソードとして語られており、複数の人と話をする時は大抵笑顔であったこと、堅苦しくない自己紹介を求められた時には「奥様と大恋愛されてご一緒になられた」話を披露したこともあったという。

石井の学長在任期間は7年余りであったが、前任の森志久馬学長時の学長代理および学長職務代行を含めると13年間にわたった。1961(昭和36)年から1974(昭和49)年は学生運動や大学紛争、大学進学率の倍増、オイルショックによる就職率悪化など、大学にとっても極めて大きな転換期であった。激動の時代において千葉商科大学を牽引し、カリキュラム改革や大学院設置などの道筋をつけ舵を切る決断を下していったのが石井だったのである。(浅沼 薫奈)

資料紹介

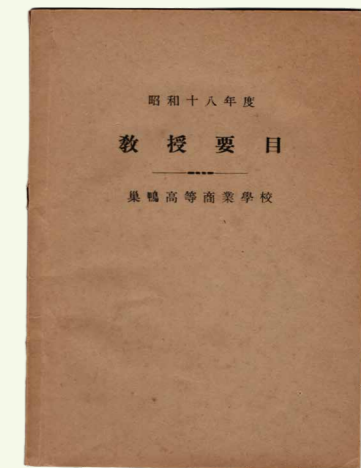
浅沼 薫奈

千葉商科大学サイエンスアカデミー特別客員教授・遠藤隆吉研究所客員研究員

巣鴨高等商業学校 『昭和十八年度 教授要目』

「教授要目」とは、現在の「シラバス」に相当する。すなわち、担当する教員が各々の指導内容や基準、到達目標を定め、授業計画などを示したものである。ただし、現代のものに比べると戦前期のものは簡易的であるうえ、執筆基準も明確に定められていなかったようで、ここで紹介する資料を見ても担当教員や科目によって記述内容は大きく異なる。何をどの順序で授業を行っていくか各回の内容を細かく示したのもあれば、「要旨」をごく短文で示すのみの授業要目もあった。

さて、『昭和十八年度 教授要目』には、第1部(昼間部)第1学年から第3学年まで、第2部(夜間部)第1学年から第3学年までの、すべての科目および授業内容が掲載されている。部や学年で異なるものの、1年間で22～29科目の授業を履修していたと見られる。創設者で校長の遠藤隆吉が担当したのは、第1部第1学年の「修身」および第2部第1学年の「修身」であった。どちらも同内容で週1時間、「口述筆記」で行うものとされた。「参考教科書」には遠藤著『巣鴨精神』(巣園学舎出版部)が採用されており、「目的」には「一般ノ国民的教養ヲ授ケ、臣道ノ



昭和十八年度 教授要目

実践ト日本商業ノ確立ヲ期セントス」とされた。「要目」には8項目が挙げられており、「1. 自然的歴史的国民的存在トシテノ人」から始まり、「2. 肇国ノ理想ト生々思想」「3. 皇国民トシテノ修練」「4. 学業修練ノ精神」「5. 家ノ生活」「6. 国家生活」「7. 皇国ノ使命ト商業道」「8. 皇運扶翼ノ道」と続く。主として遠藤の教育理念が強く反映された内容となっていたが、1943(昭和18)年度は戦時下であり、同年度中は学徒出陣が実施されるなど戦況が厳しくなった時期であった。そうした時代を一部反映しつつ授業が展開されていたと思われる。



千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会
記念誌分科会 企画展

百年の門出
卒業式・入学式の記憶

開催期間 | 2026年3月10日(火)～4月28日(火)

通常開室時間 | 月～金 9:00-17:00 ※土日祝は閉室

特別開室日 | 2026年3月20日(金・祝) / 4月4日(土) 各日 9:00-17:00

開催場所 | The University HUB (旧・瑞穂会館) 1階 MUSEUM内

入場
無料

千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会 記念誌分科会
問合せ先: 学校法人千葉学園 千葉商科大学 総務課史料編纂係 TEL: 047-373-9774

CUC 千葉商科大学

2026.3.10 tue ▶ 4.28 tue

企画展紹介資料一覧

巢鴨高等商業学校時代

遠藤隆吉卒業式訓示(1931年/1934年)
卒業証書(1951年) 等

千葉商科大学

卒業証書(1959年)
卒業式学生送辞・答辞(1963年)
卒業証書授与(1970年)
新入生歓迎会(1970年代)写真
学長式辞 等

2025年度寄贈品・借用品

応援団学生服 等
遠藤隆吉著作品 等

記念誌分科会では、企画展「百年の門出 卒業式・入学式の記憶」を開催しています。本学で100年にわたって行われてきた卒業式と入学式の様子を中心に、式典において歴代学長たちが学生たちへかけた温かい言葉のほか、学生たちの希望溢れる送辞・答辞などをご紹介します。本企画展を通じ、千葉商科大学創立100周年と学生たちの門出を祝うとともに、大学における式典の持つ意味をあらためて考える機会となればと思います。

また、卒業生の皆さまから寄せられた貴重な資料も展示しています。1950年代の学生証や卒業証書をはじめ、CUCオリジナルグッズなど、懐かしい品々をご覧いただけます。

遠藤隆吉研究所の調査現場から

遠藤隆吉先生没後80年によせて

遠藤隆吉研究所・所長
総合政策学部・教授
朽木量

遠藤隆吉先生は脳血栓が原因で1946年2月5日に享年七十三歳(数え年)を以て逝去された。したがって、本年は遠藤隆吉先生の没後80年にあたる年である。遠藤先生の生涯については『巣園自伝』(1938年)や蝦名賢造著『遠藤隆吉伝』西田書店(1989年)に詳述されている。しかし、存命中に書かれた自伝はもとより、蝦名賢造の前掲書でも、墓所についてはあまり記載がない。没後80年にあたり、遠藤先生を追慕したいと願う掃苔家諸氏のために改めて記載し、遠藤先生を偲びたいと思う次第である。

遠藤先生の墓所は、葬儀が営まれた曹洞宗瑞鳳山祥雲寺(東京都豊島区池袋3-1-6)にある。本堂に向かって左手の墓地の中にあり、本堂前から延びる墓道が行止まる手前の左側にある。現存する墓標自体は遠藤先生の没後直後に建てられたものではなく、先生の長男である遠藤健吉氏の没後に建てられたものであり、遠藤先生夫妻の他、四男六女の十人の子供の多くが合祀されている遠藤家の墓標となっている。二十歳で亡くなった遠藤先生の長女、聖心女学院の出身でキリスト教に入信し、その伶俐なる才媛ぶりに敬服した巢鴨学園同人により没後に『マリアジョセフ遠藤光子』として追悼の書籍が公開された遠藤光子氏も同墓に祀られている。『遠藤隆吉伝』の記述によると、彼女は生前にキリスト教に入信したので家人とは別の墓に入るのだろうと淋しがっていたそうであるが、墓誌に仏式の戒名と「マリアジョセフ佛諡」(佛諡は仏式の忌名名の意)の添え書きがあることを見ると遠藤先生をはじめ多くの人々の思いが感じられる。また、政治家を志すも戦時中に戦死し、遠藤先生がその死を人前も憚らずに惜しんだというエピソードが『遠藤隆吉伝』に記載されている三男、遠藤亨氏の戒名も見られる。『遠藤隆吉伝』には、上州人気質で情に厚い遠藤先生の姿が描かれているが、こうした家族とのエピソードや



遠藤家墓碑

家族構成も記載されている。熟読してから墓参すると、そうしたエピソードの数々が思い浮かばれ、一層深く追慕の念が募る。

さて、遠藤先生の戒名は「生院巢園隆徳居士」である。遠藤先生の思想の中核である「生々主義」と、遠藤先生の号であり巢鴨学園を意味する「巣園」、徳が盛んになることを意味し、隆吉から一字を取った「隆徳」が組み合わせられ、遠藤先生の思想・人柄を表す戒名である。遠藤先生は仏教にも明るく、曹洞宗の日置黙仙師より「無着居士」なる号を与えられたこともあったが、遠藤先生自身はあまりこれを用いておらず、戒名にも反映されていない。

以上、遠藤隆吉先生の墓所に因んで書き連ねてきた。祥雲寺は石ノ森章太郎など他の著名人の墓も多くあり、墓参のしやすい開かれた寺であるので、没後80年を機に遠藤先生を偲びつつ掃苔に出かけるのも良いのではないだろうか。

千葉商科大学×上海立信會計金融学院（日中教育連携の歩み

本館4階の統括学長補佐室の壁に立派な揮毫の書額が掛けられている。「日本千葉商科大学建校八十周年を賀す」として、「千秋万代 叶茂根深」と、千を枕に4文字、葉(叶)を枕に4文字のお祝い文が記されている。

贈り主は「上海立信會計学院」の院長(学長)だった唐海燕さん。2008年5月とある。同学院は1928年創立。奇しくも本学と同じ年に誕生している。80周年を迎えた2008年はまだ上海立信會計学院という名称だったが、その後2016年に上海金融学院と合併し、現在は上海立信會計金融学院になっている。約20,000人の学生が在籍し、毎年約1,000人の留学生を世界各国から受け入れている中国会計金融教育の一大拠点である。

上海立信と本学の関係は1999年に遡る。1996年に本学2番目の学部として政策情報学部が誕生する際、当時の文部省(現文部科学省)の指導で「一定数の留学生がいること」という条件が付いた。そこで当時の加藤寛学長が、日中間での連携を深める「協同コース」の設置を決めた。当初は上海立信だけでなく、華東師範大学などからも留学生を受け入れた。「協同コース」は、グローバル化が進む中で、日本の国際化が待たなしとされた当時の世相を映している。

その後、2000年頃から上海立信との関係が深まり、2004年頃から交換留学生が大きく増えた。海外大学の提携を進める一環として同学院と「協同コース」が大きな役割を担うことになったのだ。

「協同コース」では、政策情報学部の教員が上海に出かけて行き、上海立信の学生に講義を行う一方、同学院から政策情報学部へ留学生として多くの学生を受け入れた。80周年のお祝いの書額が掲げられている本館4階の部屋は当時から政策情報学部長室として使われてきた部屋で、学部と同学院との関係から、そこに掲げられることになっ

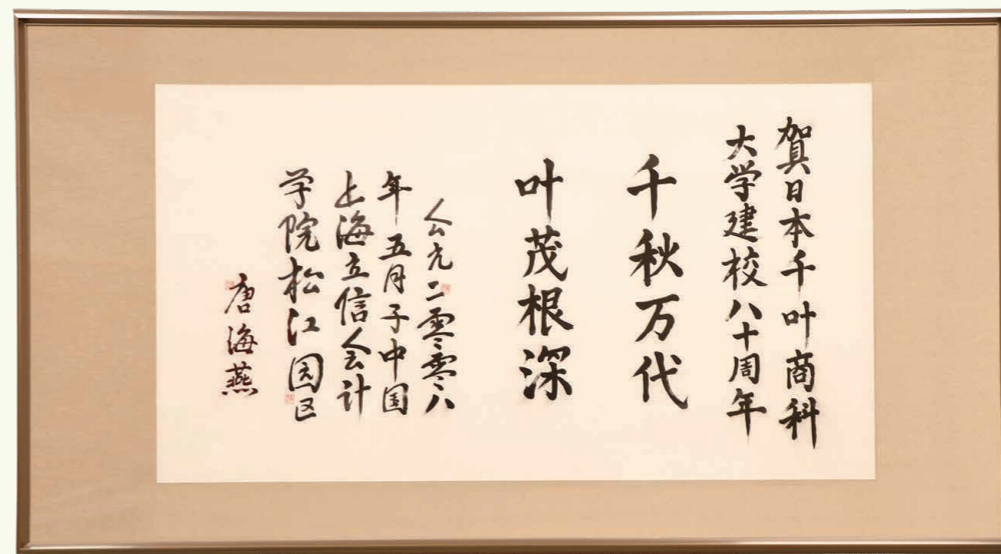
たものと思われる。

協同コースでは、夏と冬に4人ずつ教員を上海に派遣。集中講義を行った。当時、政策情報学部の教員だった内田茂男・現理事長や宮崎緑・現学長も、協同コースの集中講義のために上海に赴き、教壇に立った。当時、上海立信からはIT(情報技術)系の講義へのニーズが高く、情報が専門の先生などが多く上海に足を運んだ。宮崎先生も「コミュニケーション論」などを担当したという。

また、同学院や他の中国の大学から本学に留学し、両先生のゼミを卒業してその後、日中で活躍している人も多い。2000年代初頭の中国の青年たちは経済発展を遂げていく中で海外に目を向けていた時期で、日本はその留学先として注目されていた。本学にも今以上に優秀な学生たちが留学生としてやってきていた。

2008年当時、上海立信の院長だった唐海燕さんは、宮崎学長によると「まだ若くハンサムな先生だった」とか。実は中国の大学には学長相当のポストに2人が並んでいて、ひとは学者、ひとは中国共産党から派遣された党の幹部だった。唐海燕さんはもともと学者で若くしてそのポストに就いただけあって、とても優秀な先生だったという。若くして学長になっていた背景には、1977年まで続いた文化大革命によってベテラン教授の多くが職を失ったり、地方へ「下放」された影響があったのではないかと上海を訪れた本学教員の多くが感じたという。まだまだ文革の余波が教育の世界にも影を落としていたのだろうか。

協同コースの設立で、本学と上海立信の教員たちとの交流も進んだ。上海近郊の湖畔のレストランでの宴会が盛り上がり、大カラオケ大会になったのは今も語り草。日中の民間交流が深まっていた良い時代だったとも言える。2007年に本学学長に就任した島田晴雄氏は、就任早々訪中して、上海立信



上海立信會計学院(現在の上海立信會計金融学院)院長より贈られた揮毫

を訪れるなど、両大学の親密度は最高潮に達した。

政策情報学部で培われた上海立信との協同コースや交流の経験は、次第に全学的な国際連携へと広がり、現在の「ダブル・ディグリー」プログラムへとつながっていった。これは千葉商科大学で所属する学部と中国の上海立信(上海立信會計金融学院)の指定の学部へ学籍を持ち、4年間でそれぞれの所定の卒業要件単位を取得して両方の学位を取得することができるというプログラムで、本学の国際化の旗印とも言えるものに育っている。

このプログラムの運営をする母体として2014年に設立されたのが「千葉商科大学日中交流学院」。ダブル・ディグリーのプログラムに参加するために、本学学生は1年次の7月に実施される選考試験を受け、合格して所定の手続きを取ると、上海立信の学籍が付与される仕組みだ。本学の学生でありながら上海立信の学生になるわけだ。

受講者は、所定の期間に上海立信に約1年間留学するほか、所属する学部の正規課程の授業とは別に、日中交流学院の「修学コース」に所属して留学に備えた語学力や基礎知識を学び、留学後も上海立信を卒業するまでに

必要な学修指導を受けることになる。

「ダブル・ディグリー」は最近でこそ導入する大学も出てきているが、大学の学位認定制度が違う二国間で合意するのは並大抵のことではない。文科省も当時、二重学籍などを規制していた。当時、ダブル・ディグリーを認められた数少ない大学の一つとなった。これは島田先生の尽力が大きかった。また、中国サイドで本学学生にダブル・ディグリーを与えることについては、院長の唐海燕さんが頑張ったお陰だったという。

協同コースの頃から本学で、日中交流の架け橋役を担ってきたのが施敏さん。2004年から「CUC市川研究機構」の専任講師となり、上海立信との調整などを行ってきた。2014年には前述の日中交流学院の准教授、2015年には新しくできた国際教養学部の准教授として中国の大学との連携などについて尽力してきた。千葉商科大学日中交流学院の院長は現在、渡辺恭人・国際教養学部教授が務めている。

これまで「協同コース」「ダブル・ディグリー」のプログラムなどで学んだ本学学生はおおよそ520人、上海立信から本学に留学した学生はおおよそ250人にのぼる。このプログラムで学んで、

日中の架け橋として様々な業界で活躍している人も多い。今では本学に留学した中国人を中心に、上海で本学同窓会を開催するまでになった。

本学を目指す学生向けに年に数回開催しているオープン・キャンパス。会の始めに行う全体説明会の一場面で、登壇した本学学生が、いきなり中国語で挨拶を始める。「ダブル・ディグリーのプログラム」をPRをするのが目的だが、登壇した学生が、「このプログラムに参加するまでまったく中国語は勉強したことがなかった」と話すのを聞いて、参加した高校生は目を丸くしている。常駐している外国人スタッフといつでも英語で会話ができる「CUC International Square」と並んで、本学の国際交流・海外プログラムの目玉として多くの参加者に印象付けている。

千葉商科大学が国際交流や海外留学などのプログラムに力を入れていることは、あまり知られていない。国際教養学部が募集停止となり、海外に行きたいから千葉商科大学に行くという学生の受け皿をどう作っていくかが、今後の大きな課題になっている。

(磯山 友幸)

記念誌分科会 活動記録 (2025年10月～2026年3月)

2025年 10月	記念誌編集だより「パンタライ」第2号発刊	2026年 1月	1994年卒業生より寄贈資料受領
	第4回千葉商科大学創立100周年記念事業コア会議へ進捗状況報告		事務局倉庫所蔵品を移管(大学昇格前学生募集ポスター)
11月	第10回記念誌分科会メール審議	2月	第11回記念誌分科会
	1951年卒業生、1971年卒業生より寄贈資料受領		企画展準備として式典関係記録、写真の抽出作業
	企画展テーマ考察		1992年卒業生より資料借用
	第9回千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会へ進捗状況報告		2003年卒業生より資料借用
12月	事務局倉庫所蔵品を移管(式典式辞)	3月	企画展準備としてパネルキャプション作成、寄贈品整理、展示用キャプション作成
	1971年卒業生より寄贈資料受領		史料編纂室保管VHSビデオテープのデジタル化
	1959年卒業生より寄贈資料受領、1969年卒業生より資料借用		企画展設備設営
	2003年卒業生より資料寄贈一部資料借用		関係者への企画展プレオープン
	写真部より資料寄贈(写真部部旗)		企画展「百年の門出 卒業式・入学式の記憶」開催(4月28日まで開催)
	企画展準備として、学園年表を整理		第10回千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会へ進捗状況報告

資料寄贈のお願い

本学の100年の歩みを振り返る上で、卒業生の皆様がお持ちの資料は重要な記録・手がかりとなります。お持ちの資料をご寄贈いただける方は、下記の申込み・問合せ先までご連絡ください。
大学紛争の記録や当時の写真をお持ちの方は、ぜひご寄贈ください。

【情報・資料などの例】

卒業証書、入学手続きの記録、大学から送られた書類、大学で使用した教科書やノート、日記、写真、研修旅行・ゼミナール合宿の記録、学生寮関係資料、部活動・サークル活動関係資料など
*原本を寄贈ください。原則として返却はできかねます。

【申込み・問合せ先】

右の「お問い合わせフォーム」よりお問い合わせください。

*お問い合わせの際は、資料の内容(名称・分量等)をお知らせください。

*内容を確認の上、係よりご寄贈方法などについてご相談させていただきます。

(保管スペースの都合上、資料の受入れをお断りする場合もございます。ご了承ください。)

お問い合わせフォーム

スマートフォン用
二次元コードPC用
二次元コード

千葉商科大学記念誌編集だより 第3号



【Πάντα रेῖ(パンタライ)の由来について】

古代ギリシャ語の「Πάντα रेῖ(パンタライ)」は、ヘラクレイトスの言葉「万物は流転する」であり、生々示碑の最上部に掲げられている。「第一に万物は生々流転するがゆえに測り知ることは出来ないため万物を畏敬すべきであること、第二に人間も同様に測り知ることは出来ないため平等に扱うべきこと、第三に人間は生々発展することを希望しているのでそれを助けるべきこと」の三つを綱領とした遠藤隆吉の生々主義哲学を象徴する言葉である。編集だよりの表面に記されたこの文字は、生々示碑から拓本により写し取った遠藤自筆の文字である。

発行日:2026年4月1日

編集:千葉商科大学創立100周年記念事業実行委員会 記念誌分科会

印刷:(株)アド・プラネット

発行:学校法人千葉学園 千葉商科大学
総務課史料編纂係

〒272-8512 千葉県市川市府台1-3-1

TEL:047-373-9774(平日9:00-17:00)

創立100周年特設Webサイト URL:<https://www.cuc.ac.jp/100th/>

企画展のご案内

『百年の門出 卒業式・入学式の記憶』

本学の100年の歩みを彩ってきた卒業式・入学式。本企画展では、その時代ごとの空気や、学生一人ひとりの門出の瞬間を伝える資料を集め、紹介しています。写真や卒業証書、式典にまつわる記録を通して、懐かしさとともに、本学の歴史を感じていただける内容です。ぜひ会場にお越しいただき、本学の歩みと記憶に触れていただければ幸いです。

※4頁および大学WEBサイトをご覧ください。

